

# 黒きみけし・青きみけし

——出雲神話と万葉集の接点——

市 村 宏

昭和四十八年五月十九日、島根大学で開催されました上代文学会の大会に、はからずも公開講演を命ぜられ、病中且は不用意のまま拙い小話を申し上げて辛うじて責めを塞ぎましたが、本稿は本誌編集委員からの御要請により、当日の講演そのままの記録を提出するものです。不備不足の点は幾重にも御寛恕をおおぎます。

## 一

上代文学会の大会が、今年度は島根大学御当局の格別の御好意によりまして、神の国出雲の主都松江で開催されましたことは、会員一同にとりましてこの上ない仕合せでございます。大学御当局や地元各位の御盡力に厚く御礼を申し上げます。

出雲と大和はともに日本人の故郷ですが、あちらに御出席になっていらっしゃる五味先生も私も信濃の諏訪大社の氏子で、私どもには出雲がどうやら本家筋に思われるのです。その本家へ罷り出て、出雲神話と万葉集の接点などというテーマを考え出してお話をさせて頂くのは何やら空恐しくなって参りましたが、今更のっぴきもありません。

「黒きみけし・青きみけし」という大國主命の歌の言葉を借りまして、出雲神話と万葉集とが関り合う諸点について、ありふれたお話を申げて、責めをふさがせて頂きます。

延喜式神名帳頭注には旧事本紀を引用いたしました。

大己貴命娶<sub>三</sub>高志沼河姫<sub>二</sub>生<sub>二</sub>男兒<sub>一</sub>。建御名方神。坐<sub>三</sub>信濃国諏訪郡<sub>一</sub>。諏訪上社は也。

としております。国譲の時最後まで敢闘して山深い信濃にたて籠り、結句、御柱を立ててここより出ないことを誓って、ようやく天孫系と出雲系の和議が成立したという。大国主の御子の中でもいちばんのあばれん坊のお諏訪様の氏子であることをおもしろく思いますが、信濃では三十年毎の御柱祭を絶やさず続け、年々の御射山祭の日にはスキの箸でご飯を食べ、建御名方の昔を懐しんでおります。この建御名方の父は出雲の大己貴、母は越の沼河姫ということで、まことに申分なく出来上っております。越と信濃が出雲勢力の北限であったのでしょうか。のちに天武天皇が諏訪の地勢を調査せしめたり、その後も湖の周辺たる諏訪国を一国と認めたり、国史の上でも未だ解きがたい謎が残されております。しかしそれらはここで申し上げるべき問題ではありません。

八千矛の神こと大国主命には、命がけて娶った前妻須世理比売があるのに、さきには因幡の八上比売を、ついで越の沼名河比売を後妻として娶ります。八千矛の神も須勢理比売も、そして沼名河比売も、揃いも揃った歌の名人で、思のたけはすべてすばらしい歌謡で表現します。八千矛神の沼名河比売への求婚歌は特にすぐれ、また比売の答の歌も見ごとで美しいが、この話に続く須勢理比売の猛烈な後妻妬みがあつてこの神話は大へん人間臭くなります。八上比売が御子を木の俣に挟んで逃げ出したあと須勢理比売の後妻妬みはなおやまず、さすがの大国主もうるさくなくなり、自分の方から大和への脱出を企て、鎧に片足をかけながら、須勢理比売への愛想づかしの歌をうたいます。

ぬばたまの黒きみけしを、まつぶさにとりよそひ、おきつどり胸みるとき、はたたきもこれはふさはず、刃つなみ磯にぬぎ棄て、嶋鳥さとうりの青きみけしを、まつぶさにとりよそひ、おきつどり胸みるとき、はたたきもこもふさはず……

とあるのがそれです。黒い着物を着てみたが自分には似合わない。脱ぎ捨てて翡翠色の青い着物を着てみたが、これも自分には似合わない。……という意味は、黒きみけしを前妻の須勢理比売にたくえ、翡翠色の青きみけしは後妻の沼名河比売でしょう。須勢理比売を黒にしたのは、出雲産の瑪瑙の色にことよせ、翡翠色の青は越の宝玉翡翠に托して、沼河比売をいうもののようなのです。越後の頸城郡布川庄の名は、黒姫山麓を洗って流れ、姫川と並流して、共に日本海に注ぐ布川による地名であつたが、その布川（今田海川）と姫川は、青い宝石翡翠の産地であつたのです。姫川

は黒姫川の略称であるとは、吉田東伍博士のお説でもあります。(越後の歴史地理)

瑪瑙を豊かに産し、吹玉を發明し、玉の国としての誇をもち、玉造のすぐれた技術を玉造部によって伝えていた出雲にとつて、翡翠を産する越の頸城地方は最大の魅力であったでしょう。頸城という地名も出雲神話の国引に基づくという伝承が同地方にあります。八千矛の神の沼名河比売求婚の神話を生む契機はここにあったのではありますまいか。沼名河は瓊之河とする「考」の説がよいでしょうし、翡翠を産するところからの名で、この地方に移住した出雲玉造部の人々によってこの川が神格を与えられ、後世又ナカハがヌノカハに変わったとみてよさそうです。

玉の国なることを誇とし、玉造の技術を玉造部によって伝えた出雲が瑪瑙に優る青き美玉を産する越の頸城をどんなに欲しかったか、しかもその希望が達成されて、出雲から玉造部の人々がこの地方に移住し、翡翠の産地沼名河に神格を与え、八千矛神の求婚譚を成立させたと考えてみたいのです。

さきにも触れましたように、この神話には須世理比売による後妻妬みがあつて、わが国の釵打文学の元祖でもあります。そのためこの出雲神話は万葉集と二つの接点をもつことになります。一つは万葉集の三山歌(13)と、もう一つは「沼名河の底なる玉」(3247)との関り合いです。

須勢理比売の後妻打はすさまじく、八上比売との間にも大鬨があつて、さすがの大国主も面倒になり、黒きみけしの前妻も、青きみけしの後妻も共に打捨て、大和へ脱走して新妻を娶ろうと考えますが、そこは聡明な須勢理比売が退け時を心得て、命を巧みに引き留め、うながけるハッピーエンドを迎えることになります。信濃には大国主と須勢理比売のうながける姿を刻んだ道祖神がみられます(東筑摩郡四賀村など)。

この後妻打はしばしば後の文学の素材となりますが、必ずしもこのようにハッピーエンドにはなりません。源氏物語の六条御息所は、女性の因果を荷ったような陰湿な後妻打の役を背負わされて描かれます。仏教の怨霊思想が入ったためでもあります。池の澄めばこそ空なる月影もやどるらめ、沖よりこなみの立ち来て打てばこそ、岸もうはなり打たんとてくづる

らめ。

とあつて、後妻は前妻と岸とに挾撃されて進退極まったもようです。

源平盛衰記にある中将兼家の三妻みつよめは、三日にわたる三人妻のつかみあい、兼家は「穴六借しとて、宿所を捨て出給ひぬ。」とばかり自ら逃避すること、狂言の鈍太郎が上京の妻と下京の妾とが上京にばかり居るの、下京にばかり居るのと互の詮索がおかしいと、家を出て西国におちたのと同様です。

室町時代には世阿弥元清という舞台芸能の天才が現われて、読む古典から見聞く能を創り上げましたが、能には「船橋」や「石川女郎の能」など万葉集から直接取材した古曲もあり、後妻打では中大兄の三山歌に取材して、「うつの山の……みれば余所にもねたましき、花のうはなりうたんとて、かつらのたちえを折持ちて……ねたさもねたしうはなりを、打ち散らしうちちらす」という、能にしては激しい演技が舞台の上に展開されます。中大兄の三山歌では「敵火を愛し」と訓むべきか、「敵火雄々し」と訓むべきかの論点がありまして、その訓み方によって一男二女か、二男一女かに分れるのですが、大和生れの世阿弥は一男二女としてこの曲を演じたわけです。この大和三山のつまあらしには、播磨風土記が一枚加わりまして、出雲の阿菩の大神がこの騒動を聞き、仲裁に立とうと遙々舟で出て来られ播磨まで来てさしもの大騒動も鎮まったと聞いて、それならば大和までゆくことはあるまいと、乗船を覆してその上に鎮座しましたという話で、神阜という地名が説明されています。ここにも出雲神話と万葉集の接点があったわけです。

同じく能の「鉄輪」も平家物語・剣巻にある挿話に基づき「いでいで命をとらんとらんと、しもとふり上げ後妻うはぢの、髪を手にからまいて打つやうつの山の……」と、六条御息所型の怨霊系の後妻打が続きます。山東京伝の骨董集には「後妻打古図考」があつて、民俗化した近世初期の後妻打の古図を掲げ、併せて貞徳などの俳諧も引用しております。ここでは出雲神話のスター沼名河比売と、契沖以来万葉集の諸註で天上の川とされ、川底から美玉を産する沼名河とが、紀の一書に天沼名井のあるばかりにこれが空想の河とされ、天上に押し上げられてしまったためにこれと沼名河比売とははなればなれになり、宣長の古事記伝も沼名河と沼名河比売とを合一させることはできませんでした。宣長の師真淵は沼名河を天上には上げなかつたのですが、その実在を住吉地方に摸索しています。

翡翠の玉や原石が全国各地から発掘されますので、考古学者は国内のどこかに翡翠の産地があつた筈と考えていたのですが、その場所をつき止めることが出来ないうたわけですが、ところが昭和十八年、越後庄川の支流小滝川で一

獵師が偶然大きな翡翠の原石を発見いたしました。続いて姫川の本流からも、その西を並流する布川（田海川）からも続々と発見され、これらの河口付近からは、翡翠の玉造の行なわれた工場の址が各地にあることも判り、上代におけるわが国の翡翠の原産地は越後西頸城郡、古名布川庄一帯にわたったことがはっきり致しました。この辺のことは樋口清之博士に「ヒスイを語る」があり、この事実に基づいた松本清張氏の推理小説「万葉翡翠」もあり、私も昭和四十三年の和歌文学会の大会の公開講演で「瑪瑙と翡翠―出雲と越」という拙いお話をし、小著続万葉集新論にもその要旨を収めました。

越後西頸城郡を北流して日本海に注ぐ田海川（旧称布川）における翡翠の再発見が、出雲神話の沼名河比売の名の沼名河と、万葉集に歌われたところの、河底に青春の象徴たる玉を産する沼名河とが同一なることを立証してくれたのです。掘り盡して放棄された翡翠の礦区が、昭和になって再発見され、上代文学研究上の一つの謎が解き明されるに至ったものです。同地方には黒姫山があり、布川姫川があり、奴奈川神社が各地に祀られ、八口退治の伝説地名も各所にありまして、八口川（早川）、八口山（火打山）の名を残し、その他出雲系の神々が各地に祀られ、頸城は国引かと思わずにはおきません。（上早川村村勢案内）

## 二

しかし出雲神話の中で、日本人中知らぬものなしということになりますと、八岐大蛇退治に如くものはありますまい。これに古事記では天上を追放されて出雲に下った素盞鳴命が主役にされて、稲田姫を助けることになっていますが、この辺天孫系神話と出雲系神話とを、祖神を姉と弟とに仕立てることによって接合する政治的な意図がみえるように思われます。出雲風土記には意宇郡母理の郷の条に、

天の下造らしし大神大穴持命、越の八口を平け賜ひて還りましし時、長江山に來まして詔りたまひしく、「我が造りまして命らず国は、皇御孫、平らけくみ世知らせと依さしまつらむ。但、八雲立つ出雲の国は、我が静まります国と、青垣山廻らし賜ひて、玉珍置き賜ひ守らむ」と詔りたまひき。

と大国主の神勅が掲げてあります。この神勅では、大国主は最後に越の八口を討って国土を平定し、この国土をそつ

くり天孫に捧げて、自らは出雲一国に隠棲して、国の誇なる玉を守るといつてあります。八口のクチはクチナハのクチでもあるし、クチバミのクチでもあって、蛇の意味なることに相違なく、八口とは結局八岐大蛇と同一かと思われ従って素盞鳴命の八岐大蛇退治と、大国王の越の八口退治とは同じ神話であったと考えてよさそうです。つまり出雲が越をその勢力範囲に収めるための戦が神話化されたものとみてよいのかも知れません。しかし、苦心経營したその国土を天孫に奉り、自らは出雲一国に籠って「玉珍たま置き賜ひて守らむ」とあります。石器文化というものを最も美しく象徴すれば、玉ということになるのではありますまいか。十万年前の遺蹟からも玉は発見されています。出雲は日本列島の先進国で、石器時代からの文化の伝統を保持し得たといえましょう。八岐大蛇神話には、稲作農業の発達と鉄器文化の創始が同時に物語られていると思われませんが、稲田姫が助けられ、大蛇の尾から鉄器の花たる劍が発見されるという神話の筋は、神話ならではの妙味を持っております。出雲は必ずしも稲作農業に適する土地柄ではありませんでしたが、その代り豊富に産する砂鉄がものをいう時代がやって来たのです。八岐大蛇は出雲のマイナスとプラスを兼ね持って、越からやって来たもののようなのです。日本金工史をお書きになった香取秀真先生は、オロチをオロチオン族と理解され、越路から鉄の技術を持ったオロチオン族が砂鉄を目がけて出雲に入ったのだというお考を發表しておられます。古い話ですが、お宅へ伺って直接承ったこともありましたので、今懐かしく思い起こされます。

また先年、全国学生俳句連盟が武州高尾山で大会を催しました時、講演者として山口秋邨先生と私とが招かれ、その折御講演の外にも先生からいろいろなお話を承りましたが、先生は俳人として隠れもないお方ですけれども、学問での御専門は採鉱冶金学で、東大名譽教授でいらっしゃいます。先生はお若い時分、出雲の砂鉄について長年にわたって御研究なさいました由で、砂鉄を採る最も古い方法は、川を渡り谷を跨ぐ長い長い樋を作り、この樋の中を採掘した原鉱を水とともに流し、鉄分のみを沈澱させて採鉱する猫流しという方法が古代から行なわれ、その長大な猫流しの樋が尾から鉄の劍の出る大蛇の原型であろうと承りました。こうして出雲は玉の国から鉄の国へと移っていったもののようなのです。簸川の名も樋の川に負うたかも知れないなどと欲心を起したくなります。しかし弥生式の農耕遺跡などから木鋏や木鋤がしばしば発見されて、奈良朝になってさえ重臣たちが朝廷から鉄鋏を賜る記事を続紀にみる程で、農器具に鉄が使用されるようになるには長い歳月が必要であったのです。鉄文化の夜明けが来て、出雲の誇が玉

から鉄へと推移するにつれて、八岐大蛇退治がおもしろい変貌をみせます。羣書類従に、雲州樋河上天淵記という、大永三年（一五二三）書写の一本が収められています。この本によると雲州仁多郡三沢郷、樋河上の天淵が八岐大蛇の棲所で、素盞鳴命が奇計を設けて大蛇を退治することは同様ですが、その一部に、

東岸有<sub>二</sub>樵徑<sub>一</sub>。樵徑已上山腹至<sub>二</sub>絶頂<sub>一</sub>数十余丈皆鉄塙也。居人謂<sub>三</sub>之鉄築地<sub>一</sub>。蛇從<sub>二</sub>洲窟<sub>一</sub>通<sub>二</sub>八頭坂<sub>一</sub>山底之熟路也。昔長者以<sub>三</sub>治鉄<sub>一</sub>横塞<sub>二</sub>大蛇之熟路<sub>一</sub>云爾。

とありまして、手摩乳、脚摩乳、稲田姫の名はその俣使われながら、手摩乳は鉄長者に変わり、鉄壁を築いて大蛇の侵入を防衛したりしています。農業神話として、稲田を守る手足の労働がこの親子の名であった筈ですが、名をその俣にのこしながら、手摩乳、脚摩乳は鉄長者の夫妻に変わっています。鉄壁を築いて大蛇の侵入に対抗したとあるのですから、八岐大蛇神話は鉄長者伝説に変貌して土俗に伝えられたもののようです。大永三年に書かれた本ではありませんが、伝承はもっと古いものと思われまゝ。鉄文化への変遷につれて神話にも異説を生じた点に興味がもてます。

なお素盞鳴命は万葉集の歌とは接点を持ちませんが、大己貴は少名彦名とともに度々作品中にその名を歌われています。

生石村主真人歌一首

355 大汝<sup>オホナムチ</sup> 少彦名乃<sup>スクナヒコナノ</sup> 将座<sup>イマシケム</sup> 志都乃石室者<sup>シツノイハヤハ</sup> 幾代将経<sup>イクヨヘニケム</sup>。（卷三）  
がその一つ、

冬十一月大伴坂上郎女<sup>オホトモノサカノウラノメ</sup> 翁家<sup>オノケ</sup> 上<sup>ノ</sup> 道<sup>ミチ</sup>、超<sup>ヒコト</sup> 筑前国宗形郡名児山<sup>ナゴヤマト</sup> 之<sup>ノ</sup> 時<sup>トキ</sup> 作歌一首

963 大汝<sup>オホナムチ</sup> 少彦名能<sup>スクナヒコナノ</sup> 神社者<sup>カミヤノヒト</sup> 名著始鷄目<sup>ナブツケソメケ</sup> 名耳乎<sup>ナノミミ</sup> 名児山跡負而<sup>ナゴヤマト</sup> 吾恋之<sup>オホヒト</sup> 千重之一重裳<sup>チヘノヒトモ</sup> 奈具佐米七国<sup>ナグサメナクニ</sup>。（卷六）  
がその二つ、そしてその三つは、越中守大伴家持の教諭史生尾張小咩<sup>オホトモノサカノウラノメ</sup> 歌一首の冒頭に「大己貴少彦名の、神代より言ひ継ぎげらく、父母をみれば尊く、妻子みれば、愛しくめぐし。うつせみの、世のことわりと、かくさまにひけるものを……」と歌われるのであります。

大己貴とその協力者少彦名は静石屋にいて国土を作り、その山川に名付けたのもこの二人であったのみか、人の人たる道もまたこの二神によって定められたと万葉の人々は考えていたことが、以上の作品を通じて理解できます。つ

まりわが国土を造成したのも大己貴であり、人倫の大本を定めたのもまたこの神であったということになります。おそらく前記三つの歌の作者に共通の考え方であったのでしょう。

人皇の名をみると一代神武は神倭伊波礼毘古天皇、二代綏靖は神沼河耳命で沼名河と關係のある名、三代安寧は師木津日子玉手見命、四代懿徳は大倭日子鉏友命、五代孝昭は御真津日子訶恵志泥命、六代孝安は大倭帯日子国押人命、七代孝靈は大倭根日子子賦斗魂命、八代孝元は大倭根日子子国玖琉命、九代開化は若倭根日子子大毘毘命とある。日子は大和に王たることを示し、根子は出雲に王たることを示すものと考えますと、神武は大和、綏靖は越出身の出雲王、三代は大和、四代・五代・六代も同様、七代・八代・九代は根日子子とあつて出雲大和の王を兼ねるものの名のようにです。神武以降の天皇政治も必ずしも単純ではなく、勢力の消長も越・出雲・大和の間にあつて、それが天皇の名に現われているのではないかと考えてもみるのですが、もとよりこれは私の抱く仮説でお笑い捨て願つた方がよろしいのですが、万葉歌人たちの大己貴崇拜の甚しいのをみると、出雲勢力のちに抬頭する時もあったとみることも有り得ましようか。年々国司や国造から朝廷に玉を献じたり、即位の都度出雲国造神賀詞を奏上するだけになる前には、両者の間に色々なことがあつたであらうことは間違ありませんまい。根日子子と並んだ天皇の名をどう理解すべきか、出雲大和の王を兼ねるとみるべきか、史学方面では立派なお説もあることと存じますが、御示教を賜りたいところです。

### 三

私どものお習しました小学校の国語の教科書には、因幡の白兔や国引の話が挿画入りで出ておりまして、少年の夢をかき立ててくれました。のちに出雲風土記で学んだ時よりも、より鮮明に脳膜に焼きついて忘れたいものとなっております。文字なき以前の文学としての神話を、今の教科書にもどうか沢山載せてやって頂きたいものです。日本の子供たちは、この日本文学の根源ともいふべき神話を読む権利も聴く権利も持っていることは当然でありましよう。事は扱い方の如何の問題で、子供の目から神話を奪い、焼書抗儒めいた議論で神話を抹殺するのはどうしたことでしょうか。



素盞鳴命の玄孫に当る八東水臣津野命が、出雲国の狭苦しいところを補おうと、遠い新羅の三崎を始め、北門佐岐国・良波国・高志国などの突出して余った部分に太繩を付け、舟を曳くかのように海上を「国来々々」と呼びながら引き寄せて縫合せ、出雲を立派な国に修理した話で、出雲という新しい国が建てられる民族的な意気が、子供の眼で具象化されたかのように描かれているのが国引神話です。出雲風土記、祈年祭、六月月次などの祝詞にもみえるすがすがしい物語でございます。

越後の、今は西・中・東に分たれている頸城郡のクビキという地名も、このクニビキに負うとする伝承のあることは前にも触れましたが、美玉の国出雲にとって、翡翠の原石を豊かに河底にもつ沼名河（布川・田海川）の流域たる頸城郡は最も国引したい地域であったかも知れません。この民間語源説は一笑に付すべきではないもののようです。

この国引神話と万葉集の歌とに関り合があるかといえば、次の作を挙げることが出来ます。「廿五日新嘗会肆宴心詔歌六首」の中、

4274 天爾波母。五百都綱波布。万代爾。国所<sub>レ</sub>知牟等。五百都々奈波布。似<sub>ニ</sub>古歌<sub>一</sub>而未<sub>レ</sub>詳。（卷十九）

右一首式部卿石川年足朝臣

と記される一首がそれです。他の五首は大納言巨勢朝臣の作が筆頭に、従三位文室智努真人が年足の作について三番目に掲げられ、続いて四首目は右大弁藤原八束朝臣、五番目は大和国守藤原永手朝臣、六番目に少納言大伴宿禰家持の作が記されています。しかし六首とも新嘗会そのものを歌った作ではなく、朝廷に永く仕える身の幸を謝したり、永手や家持は梅花を歌っておりまして、ただ新嘗会に列した人々に肆宴の席で歌を召されただけで、当日の新嘗会そのものについての歌が求められたわけではありません。殊に石川年足の歌は、当日同席してその歌を記録したに相違ない家持にさえ、何を歌ったのか解し難くて「似<sub>ニ</sub>古歌<sub>一</sub>而未<sub>レ</sub>詳」と註記させたものようです。この註が家持自身によるか、後人の書入か、などの問題もありましようが、事が本命を外れますので、ここでは考慮の外におくことと致しますが、まず家持にも解し難かったものとみてよさそうです。

近代諸家のこの歌の註釈を拝見いたしますと、新嘗会に関わる歌という前提の下に、何とかこの歌を理解しようと努力され、苦心されているものようです。たとえば「天」は祭殿の天井の意味だとか、「五百つ綱はふ」とは、その

天井に沢山の綱が引き張ってあるのだとか説明されております。しかし前述の通り、新嘗会の肆宴に召された歌ではありますが、藤原永手が、

4277 袖垂而。伊射吾苑爾。 鷺乃。木伝令落。梅花見爾。

と歌っておりますように、題材には何の制約もなかったのです。従って年足の歌を理解するにしても、新嘗会そのものにこだわる必要は全くありません。しかしこれは或故事が歌われていて、その故事の何たるかを示してないために難解の作となったこと「似古歌而未詳」とされた所以であろうと思われます。

私は、この歌は国引の歌と断定して謬のないものと考えます。年足は歌人と呼ぶにはふさわしからぬ人物で、良吏であり法制家でありました。歌はこの外に、

#### 石川卿歌一首

1728 名草目而。今夜者寝南。 从明日波。恋鴨行武。 从此間別者。(卷八)

という一首を万葉集に記録されるのみです。私は石川卿の墓志銘を展観で拝見しましたのが動機となりまして、この人の伝記を一通り調べまして「石川年足考」(『続万葉集新論』所収)と申す小文をまとめましたが、その際続紀天平十一年(七三九)六月二十三日の条に、

賜出雲守従五位下石川朝臣年足、絶卅疋布六十端正税三万束。賞善政也。

とあるのをみました。その頃は貪官汚吏横行の時代で、太政官も綱規の肅正に腐心したことでしたが、出雲守石川年足は立派な治績を挙げて賞賜表彰されたものです。「善政」は何時の時代にも人民が大旱に雨を待つように望むものですが、それは多く空しい期待に終わってしまっています。国司として出雲に赴き、善政を賞されてその努力を表彰された喜びは彼にとっても生涯忘れ難いものであったでしょう。今は中央に復帰し、式部卿に任ぜられて大嘗会に奉仕している身ですが、歌を召されて脳裡に浮んだのはやはり嘗ての任国出雲の、あの国引の神話であったのでしょう。八束水臣津野命が出雲の欠けたるを補おうとして壮大な国引をやり、新羅や越などの余った崎々に沢山の太綱をつけて引寄せ、出雲の国を修理固成したのですが、年足の業績もまた出雲の足らざるを補う修理固成のわざであったのですから、彼にとりまして国引神話は他人事ではなかった筈です。古歌に似ると人に感ぜしめたのは、神話に取材した歌で

あったため、文芸享受の微妙さがこの辺にも覗われます。

#### 四

上代文学会の委員会から五味先生を通じてこのお話をするようにとお話があり、続いて題目はどうするかというお話を頂きまして、突嗟の間に黒きみけし・青きみけしとお答えしたのですが、それだけでは内容が解りかねるかと思ひまして、後から「出雲神話と万葉集の接点」という副題を添えさせて頂きました。会員の多くは万葉集専攻の方々ですが、公開講演ともあれば出雲の土地の方々もお聴き下さるのであろうと考えまして、どちら側にも興味を持って頂けるようなテーマをと物色致しました結果でございますが、所詮はお諏訪様の氏子であったからのことかも知れません。荒筋をメモにして壇に上りましたものの、時間が足りませんのであちこち飛ばしてお話を致しましたから、辻褃の合わないところなどもあったのではないかと思われます。一と通り要旨をまとめまして結びと致します。

八千矛神は越の沼名河比売を後妻に娶りますが、前妻須勢理比売のあまりの後妻妬みに面倒臭くなり、自ら大和へ脱出を企て愛想づかしの歌を歌いますが、その歌の中に「黒きみけし」とあるのが出雲の寶石瑪瑙から得た譬喩で須勢理比売のこと、「青きみけし」とあるのが後妻沼名河比売で、万葉集には「沼名河の底なる玉」と歌われ、翡翠の産地であった越後西頸城郡の布川がそれで、その神格化が沼名河比売であったことを申し上げ、契沖以降この川を天上仮空のものとして来た解釈を改めました。また後妻打は後々の文学の素材になります。万葉集には中大兄の三山歌があって、阿菩大神の登場や、能の「三山」にも作られたことを申し述べました。昭和十八年に布川（田海川）と並流する姫川の支流小滝川で翡翠の原石が発見されて以来、旧布川庄一帯から続々と発見され、玉造工場の跡も考古学者の努力であちこちに確認され、古事記万葉の沼名河は越後西頸城郡の布川であることが確実となったからです。

八岐大蛇退治は素盞鳴命のことと古事記は伝えていますが、出雲風土記は大国主の越の八口退治を記しております、根底は一つと思われますが、立証のためクチナハ・クチバミなどの語も挙げました。万葉集には大己貴を讚美する言葉を三首の歌から引用致しました。なお大蛇退治神話についての香取秀真先生や山口秋邨先生のお話をご紹介します、出雲が鉄器文化に推移する経緯がこの神話に物語られること、更に下ると雲州樋河上天淵記が示すように、手

摩乳が鉄長者に變貌することも申上げました。上代の天皇の名の中にある日子・根子という言葉に大和の王・出雲の王の意味があるのではないかという疑問も提出させて頂きました。次に国引神話に言及いたしまして、石川年足の万葉集四二七四番歌の従来解釈に安んじ難く、前出雲守で立派な治績を挙げた石川年足が、国引神話の感激を詠んだ歌であろうとの新解釈を出させて頂きました。

以上まとめて申上げは致しましたものの、反って内容の貧しさをはっきりさせただけのようない気が致します。長時間にわたり御清聴を頂きましてまことに有難うございました。